

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：32623

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730498

研究課題名（和文）将来予測における自己知識の役割と時間的距離による自己知識適用の調整効果

研究課題名（英文）Role of self-knowledge on future prediction and moderation by temporal distance.

研究代表者

藤島 喜嗣（FUJISHIMA YOSHITSUGU）

昭和女子大学・生活機構研究科・准教授

研究者番号：80349125

研究成果の概要（和文）：将来予測に対する自己知識の影響が時間的距離で調整されるかを 10 の実験で検証した。自己概念は遠い将来の予測に影響する一方で、自伝的記憶は近い将来の予測に影響した。これは、解釈レベル理論の妥当性を示しただけでなく、さらに制限条件を特定した。この制限条件の存在は、(1)異なる知識利用が解釈レベルの相違をもたらすこと、(2)将来予測が意識的過程であること、(3)自尊心の情報価が低いことを示唆した。

研究成果の概要（英文）：Ten experiments investigated whether temporal distance could moderate the effect of self-knowledge on one's future prediction. Results show that the activation of self-concept influenced future predictions about temporally distant events, whereas the retrieving of autobiographical memories influenced those about proximal events. It validated the construal level theory but also identified the restricting conditions. The existence of restricting conditions has three implications. First, the use of different knowledge might lead to different level of construals. Second, future prediction might be an explicit process. Third, the information value of self-esteem might be low.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：自己過程、自己知識、将来予測、時間的距離、解釈レベル理論

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外の研究動向と研究課題との関わり

最初に本研究課題の対象である将来予測研究を概観する。特に、①楽観主義研究、②計画錯誤研究の流れを示す。その上で、③本研究課題をこれらの研究内に位置づける。

①楽観主義研究

将来予測研究のひとつとして楽観主義研究がある(e.g., Taylor & Brown, 1988)。ここでは、将来の出来事に関する予測が楽観的となりうること、精神的健康と強く関連すること、自己をよく考えたい自己高揚動機によりもたらされることが指摘されている。この楽観主義研究には、次のような限界がある。第

一に、もっぱら動機の影響のみが指摘され、予測にいたる心的過程が検討されていない点である。第二に、楽観主義の影響がもっぱら精神的健康への影響のみで議論されている点である。そのため、他の心理的帰結は未検討のままであった。

②計画錯誤研究

従来の楽観主義研究に対し、計画錯誤(planning fallacy)に関する研究は、将来予測研究で独自の流れを形成している。計画錯誤とは、過去に度々計画通りに進まなかった経験があるにもかかわらず、実際よりも課題が順調に遂行されると予測することを指す。たとえば、Buehler, Griffin, & Ross (1994)は、理想的シナリオ作成に基づく予測に偏重し、他者や過去経験などを考慮しないことを指摘した。計画錯誤研究は、将来予測を社会的判断過程として記述した点に価値がある。

その一方で、計画錯誤研究には、理想的シナリオ作成がどのように行われたかを示唆する証拠に乏しいという問題がある。動機づけにおける誘因の影響を検討した研究(Buehler, Griffin, & MacDonald, 1997)もあるが、結果は一貫していない。また、理想的シナリオ作成時にどのような情報が利用されるのかが明らかになっていない。

③本研究課題の位置づけ

本研究課題は、将来予測について扱う点で、楽観主義研究や計画錯誤研究の中に位置づけられる。さらに、将来予測の心的過程を同定しようとする点で、計画錯誤研究の延長線上に位置づけられる。

(2) 着想に至った経緯

次に、本研究課題の着想に至った経緯を概観する。これまで申請者は、計画錯誤について検討してきた(一部の内容は科学研究費補助金の支援を受けた)。そこでは、①計画錯誤に対する気分(mood)および動機づけの影響、②自己知識活性化の影響を検討した。これらの研究から本研究課題の着想を得た上で、本研究課題に先駆けて、③自伝的記憶の影響について検討した。

①気分および動機づけの影響

将来予測に気分は影響しうるが(藤島, 2006a)、否定的気分下でも計画錯誤が生じることを示し、気分が計画錯誤の規定因ではないことを示している(藤島, 2006b)。さらに、計画錯誤に動機づけが必ずしも影響しないことを示す一方(藤島, 2006a)、予測事象までの時間的距離を遠く感じる状況下では動機づけが計画錯誤を生じさせることを見いだした(樋口・埴田・藤島, 2008)。これらの研究は、本研究課題の着想につながっている。

②自己知識活性化の影響

これまでに、自尊心への注目が計画錯誤の生起に影響することが示されている(藤島, 2000, 2004; Fujishima, 2002)。その一方で、

自尊心が高いほど計画錯誤が強まることも弱まることも示しており、結果は一貫していない。さらに、自己の肯定側面に注目させることが計画錯誤の生起に影響することも示している(藤島, 2002, 2003, 2007)。これらは、肯定的自己概念の利用可能性によらず効果が認められている。そのため、どの自己知識が利用されたのか、不明瞭なままであった。

この自己知識活性化の結果の混乱を解消するのに、動機づけにおける時間的距離感の影響の知見(樋口ら, 2008)が適用できると考えた。この知見は、解釈レベル理論(Trope & Liberman, 2003, 2010)によっている。この理論によれば、時間的距離が遠いほど、事象は抽象的な情報から解釈されやすくなる一方で、時間的距離が近い場合には、具体的な情報から解釈されやすくなる。そのため、先の知見は、動機づけのような抽象的な情報が、時間的距離を遠く感じるほど用いられやすくなった結果と解釈しうる。

自己知識には2種類あると考えられる。ひとつは、具体的なエピソードに関する記憶である自伝的記憶である。もう一つは、文脈とは切り離された自己概念であり、自己スキーマや、全体的自己評価としての自尊心が該当する。これらの知識は活性化されることで将来予測に用いられるが、どの情報が用いられるかは予測事象までの時間的距離によると考えられる。この考えにより、これまで混乱していた知見が整理されたと考えた。

③自伝的記憶の影響

上記の予測を受け、本研究採択直前に予備的な検証を行った。具体的には、自伝的記憶が将来予測に及ぼす影響が、予測事象に対する時間的距離を近く感じるときに限定されるかを検討した(藤島, 2008)。その結果、予測に合致する結果が得られた。このことから、本研究課題における仮説が有望なものであるという確信を得た。

2. 研究の目的

本研究課題は、将来予測における自己知識の役割について検討する。計画錯誤に関する先行研究を元に、理想的シナリオ作成が将来予測を生み出すと考えた。その上で、理想的シナリオ作成時の材料として、活性化された自伝的記憶や、自己スキーマならびに自尊心が用いられると考えた。さらに、本研究課題は、将来予測で用いられる自己知識が時間的距離によって調整されるかを検討する。解釈レベル理論(Trope & Liberman, 2003, 2010)に基づき、予測事象に対する時間的距離が遠い場合には、活性化された抽象的自己概念が将来予測に用いられ、予測事象に対する時間的距離が近い場合には、活性化された自伝的記憶が将来予測に用いられると予測した。

3. 研究の方法

本研究課題では、(1)抽象的自己概念の影響、(2)自伝的記憶の影響、(3)自伝的記憶と自己概念の影響の対比、の3テーマを検討した。また、各々で、時間的距離感の調整効果を検討した。基本的な実験パラダイムは、時間的距離が実際に異なる、もしくは距離感が異なる事象の予測の楽観性に対し、抽象的な自己概念、自伝的記憶、もしくはその両方を活性化操作し、それらの感情価がおよぼす影響を検討するものであった。可能な範囲で予測事象が実際にどうだったかのデータも採取し、予測と実際のズレを検討した。

(1)抽象的自己概念の影響

抽象的自己概念に関して、①特性レベルの自己概念の活性化、②全体的自己評価の活性化、③潜在的自己に関する検討の3側面に分けて検討を行った。

①特性レベルの自己概念活性化

研究1は、誠実性に関する自己概念を活性化したときに将来予測に影響を及ぼすか、その効果が時間的距離感により調整されるかを検討した。文章構成課題を用い誠実性に関する自己概念を活性化し、予測事象の時間的距離を操作した上で課題に対する問題解決シナリオを作成させた。さらに、研究2では、特性形容詞への回答順序を変えることで誠実性に関する自己概念を活性化し、予測事象の時間的距離を操作した上で課題に対する問題解決シナリオを作成させた。

②全体的自己評価の活性化

研究3では、実際に課題までの時間的距離を操作した実験を実施した。複数の特性語を自己評定させることで全体的自己評価を活性化の操作をし、レポート課題に要する時間について予測させた。課題後に実際に要した時間についてたずねた。

研究4では、自尊心を全体的自己評価として捉え、自尊心尺度への回答順序を操作することで活性化レベルを操作した。その後、予測対象となる試験までの時間的距離感をたずね、試験準備時間、成績に関する予測を求めた。試験時に、実際の準備時間、成績について回答を求めた。

③潜在的自己に関する検討

研究5では、評価条件づけの手続きを用いて、自己と肯定的特性の連合を強める操作を行い、その後、遠い将来の予測をさせた。この際、手続き上の不備が発生したため、手続きを洗練させ、研究6をあらためて実施した。

(2)自伝的記憶の影響

藤島(2008)を発展させ、研究7は、真面目さが示された自伝的記憶、やさしさが示された自伝的記憶を活性化させた後に、試験勉強時間ならびに成績の予測を求めた。

(3)自伝的記憶と自己概念の対比

自伝的記憶、自己概念の影響を個別に検討

するのではなく、①同一サンプルで異なる影響を示しうるか、②自伝的記憶と自己概念がいずれも接近可能である場合に時間的距離の調整効果がみられるか、を検討した。

①同一サンプルにおける対比

研究8では、肯定的もしくは否定的な自己概念もしくは自伝的記憶を活性化した後、就職活動に対する時間的距離感をたずね、就職活動の予測を求めた。この研究の手続きを改善し、実施したのが研究9である。事前に予測事象である就職活動への時間的距離感をたずね、肯定的、否定的な自己概念もしくは自伝的記憶を活性化し、予測を求めた。

②自己概念も自伝的記憶も接近可能な場合

研究10では、事前調査で自伝的記憶と自己概念を測定しておき、それらを利用可能な情報として実験に使用した。本実験では、感情価が異なる自伝的記憶と自己概念を呈示して同時に活性化し、時間的距離の異なる課題遂行予測に及ぼす影響を検討した。

4. 研究成果

以下では、本研究課題で実施した実験から主要な結果を報告する。

(1)抽象的自己概念の影響

①特性レベルの自己概念の活性化

誠実性に関する自己概念を活性化させた実験参加者は、時間的距離が近い場合よりも遠い場合にまじめに勉強すると回答した(図1)。人は、将来予測時に理想シナリオを作成し、それに基づいて予測する(Buehler et al., 1994)。このシナリオ作成時に、活性化した自己概念が影響したと考えられる。ただし、誠実性に関する自己概念は抽象情報に相当するので、時間的距離が遠い場合に影響が現れた。

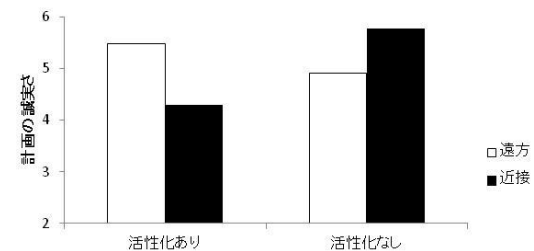


図1 活性化した誠実さと時間的距離が計画評価に及ぼす影響

②全体的自己評価の活性化

特性語を用いて全体的自己評価を活性化させた場合、活性化した全体的自己評価は、時間的距離が遠い場合には将来予測に影響を及ぼしていた(図2)。時間的距離が近い場合、活性化した自己概念は影響を及ぼさなくなっていた。研究で用いた課題は一定の労力を必要とするものであり、早く終わらせるという予測は楽観的である。つまり、時間的距離が遠い場合には、活性化した自己概念に対応した楽観性を示したといえる。

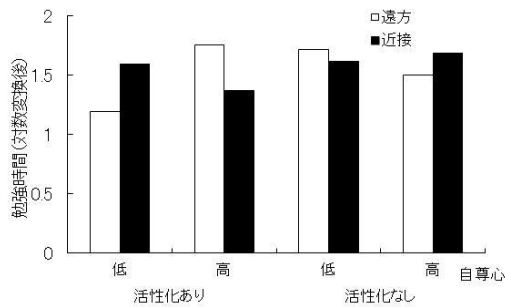


図3 実際の勉強時間に自尊心活性化と時間的距離感が及ぼす影響

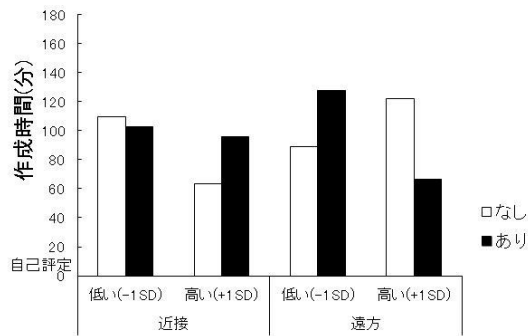


図2 課題作成時間予測の予測値

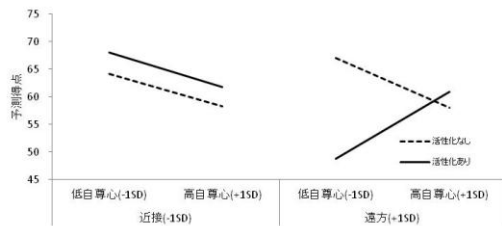


図4 活性化×時間的距離感に見た試験直後の得点予測に対する自尊心の効果

しかし、全体的自己評価としては類似のものである自尊心を活性化した場合、結果が異なった。仮説に反し、自尊心活性化と時間的距離は試験勉強時間および成績の予測に影響しなかった。その一方で、実際の勉強時間には2次の交互作用効果がみられた(図3)。活性化なし条件では、実際の勉強時間に差はみられなかったが、活性化あり条件では、時間的距離感が遠方の場合に自尊心が高まるに連れて勉強時間が長くなった。近接の場合には、その影響は消失した。同様の結果が、成績予測の変化にもみられた(図4)。全体的には試験5週間前よりも試験直後の方で予測得点が低かった。この時間経過による楽観性の低下は、試験5週間前に試験を遠くに感じていて、低自尊心が活性化した場合に顕著であった。しかし、仮説に反し、自尊心活性化は5週間前の得点予測に影響せず、時間的距離感による調整効果もなかった。その一方で、試験直後の得点予測には2次の交互作用効果が生じた。この結果は、試験勉強時間に関する結果と同様、自尊心が遠い将来の予測に用いられない可能性を示唆する。

予測において影響がみられなかったこと

に関しては、抽象度と自尊心の内容の問題が考えられる。試験準備は、出来事として具体的であり、きわめて抽象的な情報である自尊心との間で抽象度適合上の問題が生じたかもしれない。また、自尊心は対人関係に特化したものである可能性がある。実際において影響がみられたことに関して、活性化した自尊心が予測に対するコミットメントを助長した可能性が考えられる。特に、高自尊心が活性化した人は、予測における社会的望ましさに一貫するよう自己確証的な動機づけが高まったのかもしれない。時間的距離感による調整効果も、自尊心が自己知識の中でも抽象的であるからかもしれない。

③潜在的自己に関する検討

評価条件づけを用い、潜在的自己評価における自己と肯定的特性との連合を強める操作を行ったが、将来予測に対して何の影響も及ぼさなかった。手続きを洗練させて再実験したが、効果は認められなかった。

④抽象的自己概念の影響に関するまとめ

将来予測に対する抽象的自己概念の影響とその調整効果について、本研究課題の仮説と一致する結果もみとめられたものの、その範囲が限定されていた。自尊心のような極めて抽象的な側面の影響は認められず、ある程度の領域固有性がある特性レベルの自己概念において仮説通りの結果が認められた。この結果は、予測事象における文脈情報との適合の問題として捉えることが可能である。もしくは、自尊心のあり方を見直すことで説明可能かもしれない。以上の示唆は、解釈レベル理論の妥当性検証に寄与すると共に、自己知識の構造とその機能に関する議論に基礎的なデータを与えるだろう。

次に、潜在的自己評価においては何の影響も認められない一方で、顕在的な自己評価において将来予測への影響と時間的距離による調整効果が認められた。これは、将来予測が意識的過程である可能性を示唆し、社会的推論研究の進展に寄与すると考えられる。

(2) 自伝的記憶の影響

想起内容と予測事象との対応に関わらず、肯定的な自伝的記憶を想起すると将来予測が楽観的になった。ただし、この効果は、予測事象である試験が時間的に近く感じられる場合に限定されていた(図5)。将来予測に想起内容と予測事象との対応を要しないと

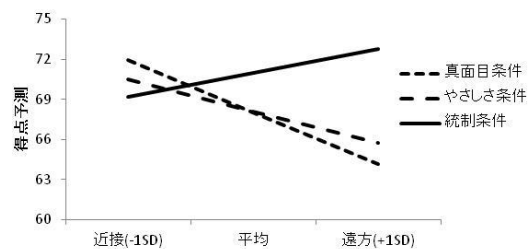


図5 記憶内容一致効果と時間的距離感による調整

いう知見は、想起した自伝的記憶が将来予測に直接用いられるのではなく、直前の想起経験が将来予測時における情報探索の感情価を限定する可能性を示唆している。

(3) 自伝的記憶と自己概念の影響の対比

① 同一サンプルにおける対比

自己知識の選択的想起は、主観的に近い将来の予測楽観性に影響を及ぼしていた。特に、否定的な自己関連情報の想起は、悲観的予測を増大させる傾向にあった。しかし、予測と異なり、自己概念もしくは自伝的記憶といった想起情報の違いによる将来予測への影響は、時間的距離感によって調整されなかった(図6)。自己概念を想起させた条件において具体的なエピソードを記載した実験参加者が散見された。これにより特性条件においても事例条件と同様の結果が得られたのかもしれない。

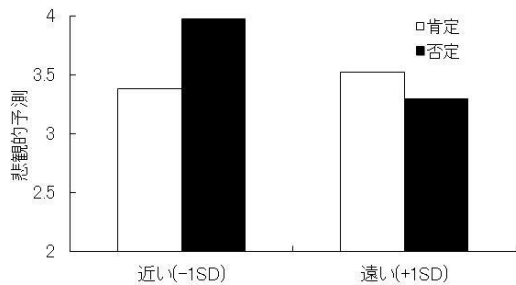


図6 悲観的予測への感情価と時間的距離感の影響

そこで、自己概念想起の手続きを改変し、再検証を試みた。その結果、肯定的な自己関連情報を想起した場合、予測事象を時間的に遠く感じるほど予測は楽観的になった。このことは、限定的ではあるが、自己関連情報が将来予測に寄与することを意味する。しかし、その効果は本研究の予測と異なり、想起が特性か事例かによって調整されなかった(図7)。

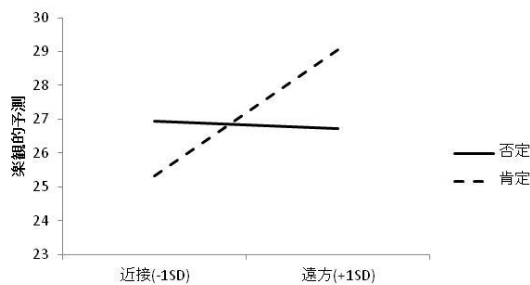


図7 楽観的予測への感情価と時間的距離感の影響

上記2研究は、自己概念と自伝的記憶と機能的に変わらないという可能性を示す。実験操作上の問題もあるが、自己概念内で抽象—具体の相違、自伝的記憶内で抽象—具体の相違があり、その影響がみられたのかもしれない。また、2研究で将来予測に影響を及ぼす側面が異なった。このような効果の違いに関して新たに検討する必要がある。

② 自己概念も自伝的記憶も接近可能な場合

事前に自己概念と自伝的記憶を測定し、実験時に感情価を対立させつつ、自己概念と自伝的記憶を同時に呈示して接近可能性を高めるという操作を行ったが、この操作の影響はみられなかった。このことは、将来予測に対する自己知識の影響が接近可能性の問題であり、予測時の情報重み付けの問題でないことを示唆している。

③ 自伝的記憶と自己概念の対比のまとめ

手続き上の問題もあり、同一サンプルにおける対比の研究では十分な知見が得られなかった。その上で積極的に解釈すると、自己概念と自伝的記憶の対比のみではなく、自己概念内、自伝的記憶内での抽象度の違いが存在する可能性がある。この知見は、自己知識研究に対して寄与するだろう。

また、自己概念もしくは自伝的記憶が同時に接近可能であった場合には、その影響が相殺される可能性が示された。つまりは、接近可能な情報における重み付けの問題ではないことを示している。この結果は、解釈レベル理論が主張する心的過程について示唆的である。解釈の抽象度の違いは、活性化した知識表象の接近可能性の違いとして表現されているが、この知見と整合するものである。

(4) 成果のまとめ

以上の成果は、本研究課題の仮説が支持されるものの、一定の制限があることを示した。知見と展望は、以下のようにまとめることができる。

① 将来予測における自己知識の影響

自己知識は、その抽象度から自己概念と自伝的記憶に分類することができるが、いずれも活性化することによって将来予測に影響をおよぼすことが明らかになった。また、抽象的情報である自己概念は予測事象の時間的距離が遠いときに影響を及ぼし、具体的情報である自伝的記憶は時間的距離が近いときに影響を及ぼすというデータを得ることができた。この結果は、解釈レベル理論と整合するものであった。

興味深いことに、自伝的記憶の内容は予測事象と対応しない場合でも影響を及ぼした。これは実験操作上のことで、自発的な自伝的記憶想起の場合とは事情が異なるが、情報検索において選択性がそれほど強くなく、他側面にも活性化拡散が及びやすいこと、事前の想起経験は後続想起の感情価選択のレベルで選択性をもたらす可能性を示唆している。

② 自尊心の問題

本研究課題の一連の研究では、自尊心は将来予測に影響を及ぼしていなかった。これは、自尊心の影響を強く主張する楽観主義研究の知見と対立するものである。この対立を解消するには、2つの視点がありうる。これらは、自尊心とは何であるかという古典的な問いに資するところがあるだろう。

第一の視点は、自尊心の抽象度は極めて高いというものである。そのため、具体的事象の予測に用いることが困難である可能性がある。抽象的であるがゆえに、情報価が低いこともあるかもしれないし、予測事象と抽象度が対応しないこともあるだろう。古典的な楽観主義の研究もこの視点で解釈可能である。古典的な研究は、漠然とした抽象的事象を扱っており、自尊心と抽象度が対応すると考えられるのである。

第二の視点は、自尊心が領域限定的であるという見方である。ソシオメータ理論(Leary & Baumeister, 2000)の考え方はこの可能性を示している。この点に関しては、予測事象を対人関係のものに換えて検討するという方法がありうる。今後検討する価値がある。

③自己知識の抽象度再考

本研究課題では、自己知識の抽象度の違いを自己概念と自伝的記憶の対比で考えた。しかし、研究が暗示するように、自己概念、自伝的記憶のそれぞれの中でも抽象度の違いがある可能性がある。つまり、自己概念における全体的自己評価と特性のレベルの相違、自伝的記憶における習慣的エピソードと個別的なエピソードの相違である。このような相違が将来予測にどのような影響を及ぼしうるのか、検討が必要である。

④意識的過程としての将来予測

将来予測に潜在的自己評価は影響を及ぼさなかった。実験操作上の問題も考えられるが、少なくとも本研究課題で扱った将来予測が意識的過程であったことによると考えられる。全ての研究を通じて自己知識の影響がみられたのは、自己知識が顕在的で、また関与プライミングを受けたときであった。今後は、顕在的知識に対する関与プライミングの影響、潜在的自己知識が将来予測に影響を及ぼす要件について検討する価値がある。

また、将来予測における情報利用の偏重は、情報の重み付けの問題ではなく、接近可能性の問題である可能性も示した。この点についてはまだ十分な知見をえるまでには至っていない。今後の検討が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①藤島喜嗣、試験準備に活性化した自尊心と時間的距離感が及ぼす影響(2) 成績予測の系時的变化、昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 14, 21-30、査読有、2012年
- ②藤島喜嗣、試験準備に活性化した自尊心と時間的距離感が及ぼす影響: 勉強時間における予測と実際、学苑 人間社会学部紀要, 844, 1-9、査読有、2011年

③藤島喜嗣、気分と報酬遅延が計画錯誤に及ぼす影響、昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 13, 25-32、査読有、2011年

④樋口収・埴田健司・藤島喜嗣、達成動機づけと締め切りまでの時間的距離感が計画錯誤に及ぼす影響、実験社会心理学研究, 49, 160-167、査読有、2010年

[学会発表] (計7件)

①藤島喜嗣、将来予測に対する自己関連情報の選択的想起の影響と時間的距離感による調整効果: 就職活動場面を用いた質問紙実験(2)、日本社会心理学会第52回大会、名古屋大学(愛知県)、2011年9月18日

②藤島喜嗣、誠実性概念の活性化が将来予測に及ぼす影響と時間的距離感による調整効果、日本心理学会第75回大会、日本大学(東京都)、2011年9月15日

③藤島喜嗣、試験成績予測に活性化した自尊心と時間的距離感が及ぼす影響、日本グループ・ダイナミクス学会第58回大会、昭和女子大学(東京都)、2011年8月23日

④藤島喜嗣、解釈レベル理論の特徴・問題点・競合理論、早稲田大学消費者行動研究所公開シンポジウム「解釈レベル理論と消費者行動研究」、早稲田大学消費者行動研究所(東京都)、2011年7月30日

⑤藤島喜嗣、時間的距離と自己概念の活性化が課題遂行予測に及ぼす影響、日本心理学会第74回大会、大阪大学(大阪府)、2010年9月20日

⑥藤島喜嗣、試験準備時間の予測と実際に活性化した自尊心と時間的距離感が及ぼす影響、日本社会心理学会第51回大会、広島大学(広島県)、2010年9月18日

⑦藤島喜嗣、将来予測に対する自己関連情報の選択的想起の影響と時間的距離感による調整効果: 就職活動場面を用いた質問紙実験、日本グループ・ダイナミクス学会第57回大会、東京国際大学(埼玉県)、2010年8月28日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤島 喜嗣 (FUJISHIMA YOSHITSUGU)
昭和女子大学・生活機構研究科・准教授
研究者番号: 80349125

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし